

米国



1 農畜産業の概況

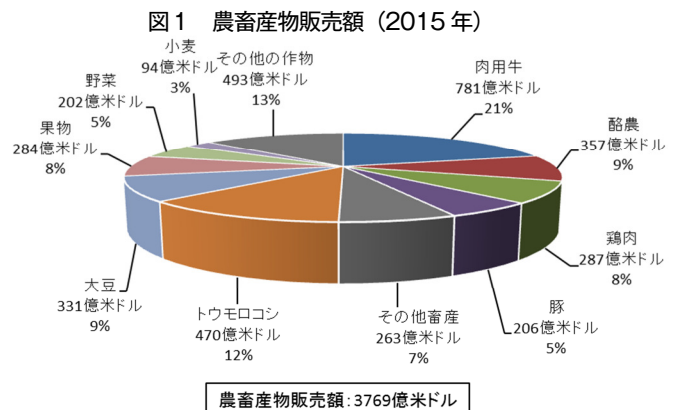
米国経済における農業の位置付けは、他産業の発展に伴い低下傾向にあるが、2015年のGDPに占める農業生産の割合は4.5%(前年比0.1ポイント減)と、前年並みとなった。

2015年の農業経営体数(農畜産物の年間販売額1000米ドル以上)は、前年比0.9%減の206万7000戸、農用地面積は同0.1%減の9億1200万エーカー(3億6480万ヘクタール)となった。1経営体当たりの農用地面積は、同0.7%増の441エーカー(176ヘクタール)であった。なお、年間10万米ドル以上の農畜産物販売実績のある経営体は全体の19.7%で、全農用地面積の69.3%を占めた。

2015年の農畜産物販売額(現金収入。自家消費分を除く)は、3769億米ドルと前年を11.1%下回った(図1)。

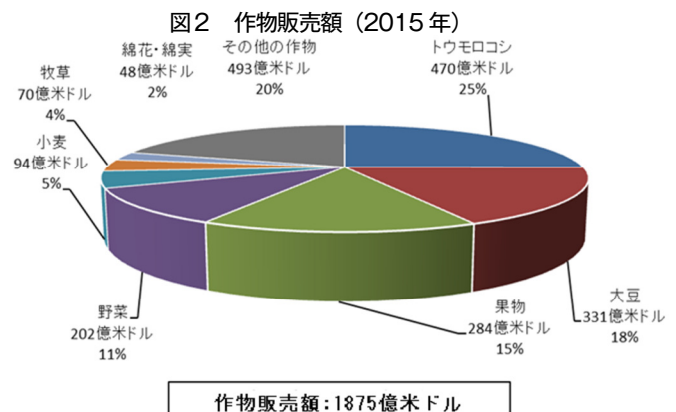
部門別に見ると、作物部門は同11.3%減の1875億米ドルとなった。このうち、生産量の約4割が家畜飼料に仕向けられるトウモロコシは、470億米ドル(作物部門に占める割合は25.1%)と最大を占めた。次いで、大豆が331億米ドル(同17.7%)、果物が284億米ドル(同15.2%)、野菜が202億米ドル(同10.8%)となった(図2)。

畜産部門は、同11.0%減の1895億米ドル(農畜産物販売額に占める割合は50.3%)となった。この内訳を見ると、肉用牛が781億米ドルと畜産部門のうち41.2%を占めた。次いで、酪農が357億米ドル(畜産部門に占める割合は18.9%)、鶏肉が287億米ドル(同15.2%)、豚が206億米ドル(同10.9%)となった(図3)。



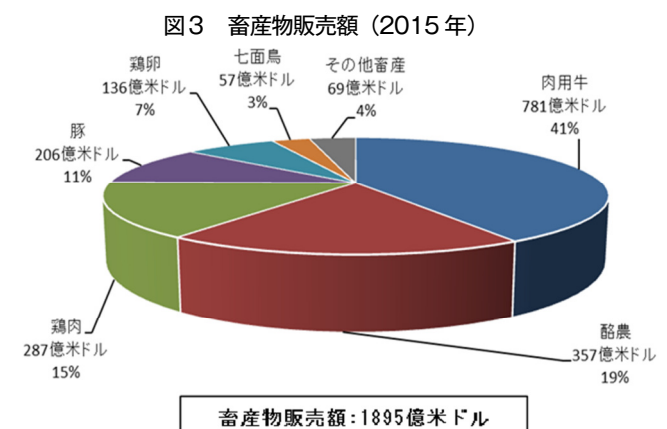
資料: USDA [United States and State Farm Income Data]

注: 暫定値。



資料: USDA [United States and State Farm Income Data]

注: 暫定値。



資料: USDA [United States and State Farm Income Data]

注: 暫定値。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

米国は、年間 9000 万トンを超える生乳を生産する世界最大級の酪農国である。しかし、国内に巨大な消費市場を抱えていることなどから、国際乳製品市場での米国の位置付けは、さほど高いものとはなっていない。

① 主要な政策

酪農の主な制度には、連邦生乳マーケティング・オーダー制度（FMMO）、酪農マージン保護プログラム（MPP）、乳製品寄贈プログラム（DPDP）がある。

FMMOは、オーダー（生乳取引地域）内で取り引きされる生乳について、飲用向け1分類と加工向け3分類の計4分類の用途別に分け、それぞれの最低取引価格を設定するとともに、生乳取扱業者に対して、生産者へのプール乳価（用途別乳価を加重平均した乳価）支払いを義務付けている。これにより、生産者に対して安定的な収入の確保を可能とするとともに、消費者に対して合理的な価格で牛乳乳製品を供給することを目的としている。2000年1月からは、①オーダー数の再編統合（当初の31地域が段階的に統合され、2004年4月から10地域へ）②生乳の用途区分の再分類

（3区分から現行の4区分へ）③最低取引価格の設定に当たり、従来の基礎公式価格（BFP）に代えて、多成分価格形成システムに基づく新基礎価格の導入などの変更が加えられた。

MPPは、2014年農業法で、生乳収入損失補償契約プログラム（MILC）に代わる酪農家のセーフティネットとして創設された制度である。MPPは、補填の指標に飼料費を加味し、乳価と飼料費の差を酪農家の収益（マージン）とし、掛け率に応じて補償することにより、再生産を確保することを目的としている。

また、DPDPも2014年農業法で創設された制度である。DPDPは、乳製品価格の間接的な支持を目的に、一定の経済状況下において、米国農務省（USDA）による乳製品の買い上げを実施するとともに、

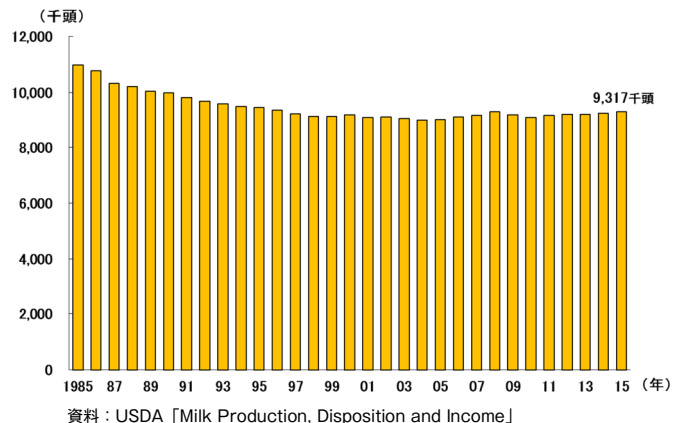
購買した乳製品を低所得者への食糧援助に使用するように設計されている。

② 生乳の生産動向

ア 飼養頭数

乳用経産牛飼養頭数は、1980年代中ごろから一貫して減少傾向で推移してきたが、1999年に下げ止まった後は、小幅な増減を繰り返している。2015年の乳用経産牛飼養頭数は、前年比0.6%増の931万7000頭となった（図4）。

図4 乳用経産牛飼養頭数の推移



イ 生産量

2015年の生乳生産量は、乳用経産牛頭数および1頭当たり乳量の増加により、9463万4000トン（前年比1.3%増）とわずかに増加し、5年連続で前年を上回った（表1）。

表1 生乳・乳製品の生産量

（単位：千トン）

区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
生乳	88,978	90,962	91,276	93,464	94,634
バター	821	843	845	842	843
脱脂粉乳	689	800	670	800	827
チーズ	4,809	4,938	5,036	5,222	5,370

資料：USDA「Milk Production, Disposition and Income」、「Dairy Products」

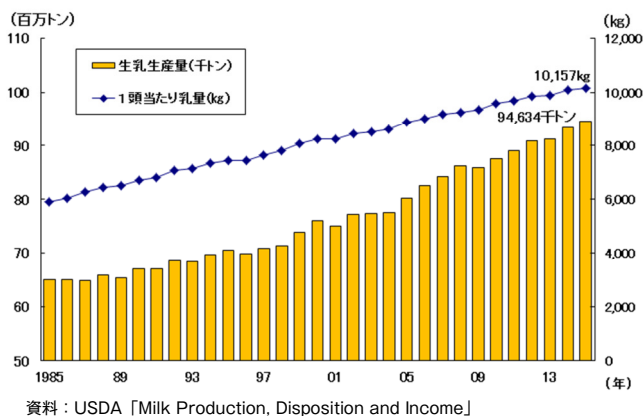
注：チーズはカッテージチーズを除く。

ウ 経産牛1頭当たり乳量

経産牛1頭当たり乳量は増加傾向で推移しており、2015年では、1万157キログラム（前年比0.6%増）

とわずかに増加した（図5）。

図5 生乳生産量と1頭当たり乳量の推移



エ 地域別生産動向

生乳生産量の5割強は上位5州（カリフォルニア、ウィスコンシン、アイダホ、ニューヨーク、ペンシルバニア）で占められており、上位10州（上位5州にテキサス、ミシガン、ミネソタ、ニューメキシコ、ワシントンを加える）では、全体の約7割を占めている。

さらに一部の州では、安価な労働力を背景とした大規模化が進んでおり、代表的なカリフォルニア州は、1993年にウィスコンシン州を抜いて国内最大の生乳生産州になって以降も増加基調で推移してきた。

しかしながら、カリフォルニア州については、2008年終盤の国際乳製品価格の暴落を受けて、2009年には1792万トン（同4.1%減）へ減少した後、回復に転じ、2014年までおおむね増加傾向で推移したものの、2015年は、干ばつの影響により同3.4%減の1855万トンとなった。一方、生乳生産量第2位のウィスコンシン州は、2015年には1316万8000トン（同4.4%増）となった（図6）。

図6 主要州の生乳生産量の推移

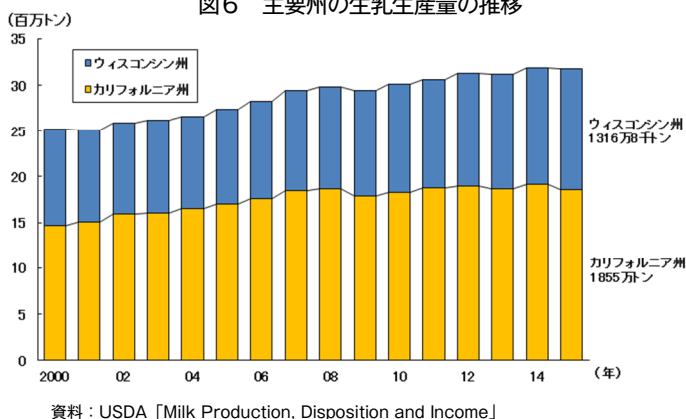


写真1 酪農家での乳牛飼養風景

③ 牛乳乳製品の需給動向

ア 生産動向

2015年のチーズの生産量（カッテージチーズを除く）は、前年比2.8%増の536万9000トンとなった（図7）。このうち、チェダーチーズを中心とするアメリカンタイプ^{（注1）}は、213万トン（同2.3%増）となり、モッツァレラチーズなどイタリアンタイプ^{（注2）}は、230万8000トン（同2.8%増）となった。

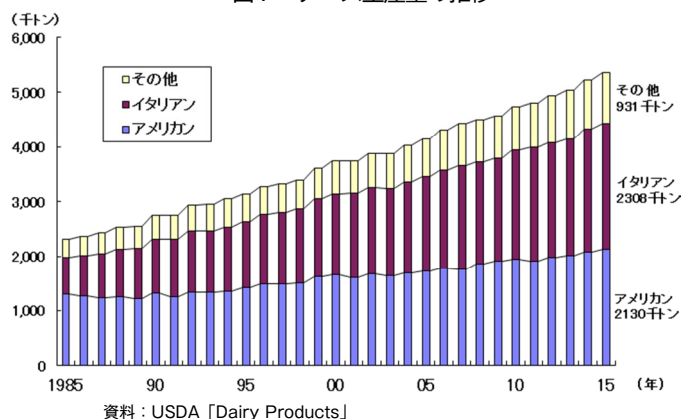
イタリアンタイプは、宅配ピザやファストフードでの需要増により、過去20年以上増加基調で推移している。同年のチーズ生産量に占める割合は、アメリカンタイプが39.7%（同0.2ポイント減）、イタリアンタイプが43.0%（前年同）となった。

また、バターの生産量は前年並みの84万3000トン（同0.1%増）となり、脱脂粉乳の生産量は82万7000トン（同3.3%増）と増加した。

（注1）アメリカンタイプには、チェダー、コルビー、モントレージャックなどを含む。

（注2）イタリアンタイプには、モッツァレラ、パルメザン、プロヴォローネ、リコッタ、ロマーリオなどを含む。

図7 チーズ生産量の推移



イ 消費動向

1人当たり年間飲用乳消費量（製品ベース、以下同じ）は、他飲料との競合などにより、近年減少傾向で推移しており、2015年は70.8キログラム（前年比1.9%減）となった。なお、飲用乳については、近年の健康志向を反映し、低脂肪牛乳や無脂肪牛乳など低脂肪タイプの消費量が増加傾向で推移している。

一方、1人当たり年間チーズ消費量（カッテージチーズを除く）は、近年、増加傾向で推移しており、2015年は15.9キログラム（同2.8%増）となった。また、1人当たり年間バター消費量は、前年と同様2.5キログラムとなった。

④ 牛乳乳製品の価格動向

ア 生乳価格

2015年の生乳の生産者販売価格は、国際的な乳製品需給の緩和を受けて100ポンド当たり17.10米ドル（前年比28.8%安）と大幅に下落した（表2）。

表2 生乳の生産者販売価格

（単位：米ドル/100ポンド）

区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
生乳平均価格	20.10	18.50	20.10	24.00	17.10

資料：USDA「Agricultural Price」

イ 乳製品の卸売価格

2015年のバターの卸売価格は、1ポンド当たり208.9セント（同3.5%安）となったものの、依然高水準となっている（表3）。脱脂粉乳は、供給量の増加により同90.9セント（同40.7%安）と大幅に下落した。チェダーチーズは、国内生産量および輸入量の増加により在庫量が高水準で推移したことから、191.1セント（前年比20.5%安）と下落した。

表3 乳製品の卸売価格の推移

（単位：セント/ポンド）

区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
バター	196.2	160.3	155.6	216.4	208.9
脱脂粉乳	151.7	134.7	170.3	171.5	90.9
チェダーチーズ	180.6	169.8	176.4	240.4	191.1

資料：USDA「Dairy Market News」

注1：バターはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格（グレードAA）。

2：脱脂粉乳は西部のFOB価格。

3：チーズはシカゴ・マーカンタイル取引所の現物価格。



写真2 小売店でのチーズの陳列風景

⑤ 乳製品の政府買い上げ

乳製品価格支持プログラム（DPPSP）は2013年9月で廃止されたことから、以後同プログラム下での政府による乳製品の買い上げは実施されていない。

代わりに創設された乳製品寄贈プログラム（DPDP）においても、2015年は、堅調な輸出需要を反映して米国内の乳製品価格が堅調に推移したことから、政府による余剰乳製品の買い上げは5年連続で実施されなかった。

(2) 肉牛・牛肉産業

米国は、世界の牛肉生産量の約2割を占める最大の牛肉生産国であると同時に、世界最大の牛肉輸入国でもある。国内的にも、肉牛産業の農産物販売額に占める割合は最大となっており、米国農業の中で最も重要な部門の一つである。

肉用子牛生産は、家族経営による生産・管理が行われる一方、育成された肥育もと牛に関しては、大規模なフィードロットで効率的な穀物肥育が行われている。また、肉牛の流通面では、大手バッカーによる寡占化が顕著となっている。

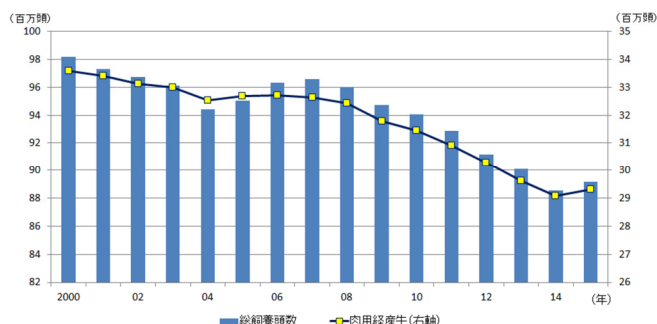
① 肉牛の生産動向

最近の牛飼養頭数は、2006 年後半以降の飼料コスト高や 2011 年以降の干ばつなどにより、肉用牛繁殖経営の収益性が悪化し、肉用繁殖雌牛を中心に淘汰が進んだことから、2014 年まで減少傾向で推移してきたが、2015 年は、草地の状態が改善されたことによる牛群の再構築の進展により、前年比0.6%増の8914万3000頭と、2007 年以降の増加に転じた(図8)。

2015 年の飼養頭数の内訳を見ると、肉用繁殖雌牛は同0.7%増の2930万2000頭となり、500ポンド(約227キログラム)以上の肉用繁殖後継牛は、608万6000頭(同9.6%増)とかなり大きく増加した。

また、同年の子牛生産頭数(乳用種を含む)は、同2.3%増の3430万2000頭となった。

図8 牛飼養頭数の推移



資料：USDA「Cattle」

注：各年1月1日現在。



写真3 フィードロットの風景

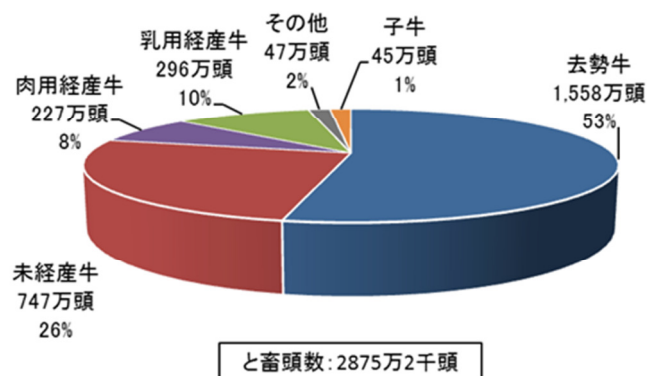
② 牛肉の需給動向

ア 生産動向

2015年の成牛と畜頭数は、前年比4.7%減の2875万2000頭となった。

種類別では、去勢牛は同0.3%減であったが、肉用経産牛は同12.8%減、未經産牛は同12.3%減、子牛は同20.0%減と、牛群再構築に向けた保留により減少した。一方、乳用経産牛は同3.5%増となった(図9)。

図9 種類別と畜頭数(2015年)



資料：USDA「Livestock Slaughter」

一方、2015年の成牛のと畜時平均生体重(連邦政府検査ベース)は、飼料穀物価格安による肥育期間の長期化などを背景に同2.2%増の617キログラムとなった。また、平均枝肉重量(連邦政府検査ベース)は、375.8キログラムと前年を2.5%上回った。同年の肥育主要7州(アリゾナ、カリフォルニア、コロラド、アイオワ、カンザス、ネブラスカ、テキサス)の肥育もと牛導入頭数は、1786万1000頭(同5.2%減)、また、肥育牛出荷頭数は1723万2000頭(同4.2%減)となった。

こうしたことから、同年の牛肉生産量（枝肉重量ベース）は、同2.3%減の1074万9000トンとなった（表4）。

表4 牛肉需給（枝肉換算）の推移
（単位：千トン）

区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
生産量	11,882	11,754	11,666	11,000	10,749
輸入量	933	1,007	1,020	1,337	1,529
輸出量	1,263	1,112	1,174	1,167	1,028
在庫量	272	276	265	268	310
消費量	11,579	11,679	11,556	11,195	11,236
1人当たり消費量 （年間、キログラム）	26.0	26.0	25.6	24.6	24.5

資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook：Table」

注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

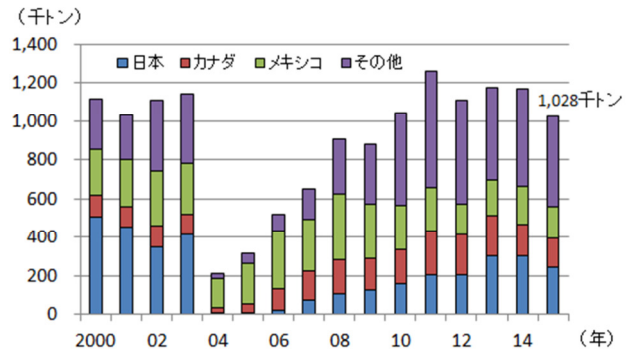
2015年の牛肉輸入量（枝肉重量ベース）は、米国内の減産分を補完する形で、前年比14.4%増の152万9000トンとかなり大きく増加した。国別に見ると、最大の輸入先の豪州は、干ばつによる飼養環境の悪化から牛の淘汰が進み、牛肉供給量が増加したことから、57万1000トン（同16.2%増）と前年から引き続き大幅に増加した。また、ニュージーランドも、同10.8%増の30万トンと増加した。次いで多かったカナダは、28万5000トン（同4.4%増）となった。同国も繁殖雌牛飼養頭数の減少傾向が続いていたものの、米国からの強い需要により同国からの輸入も増加した。

同年の生体牛の輸入は、メキシコからが115万4000頭（同3.5%増）と米国からの強い需要により増加した。一方、カナダからは、同国でも飼養頭数が減少していることに加え、前年に大幅に増加した反動により83万頭（同33.2%減）となった。全体では198万4000頭（同15.9%減）と大幅に減少した。

2003年12月、米国内で初めてBSEが発生した影響を受け、2004年に大幅に減少した牛肉輸出量は、2005年以降順調に回復し、2011年に過去最高を記録した。2012年以降1100トン台で推移していたが、2015年は、供給量の減少やこれに伴う価格高などにより、102万8000トン（同11.9%減）と大きく減

少した。国別では、最大の輸出先である日本向けが24万5000トン（同18.6%減）、メキシコ向けは16万5000トン（同16.6%減）、カナダ向けは14万7000トン（同11.1%減）といずれも大きく減少した（図10）。

図10 牛肉の輸出量と相手国の推移



資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

ウ 消費動向

1人当たり年間牛肉消費量（小売重量ベース）は、牛肉価格高や消費者嗜好の変化により、年々減少傾向で推移しているが、2015年は、前年並みの24.5キログラム（前年比0.4%減）となった。

③ 肉牛・牛肉の価格動向

ア 肥育もと牛価格

2015年の肥育もと牛価格（オクラホマシティー、600～650ポンド）は、飼養頭数の減少および牛群再構築に伴う保留傾向により、7月まで前年を上回る高値で推移したが、8月以降、高値を敬遠したフィードロットからの引き合いが減少するなどして下落し、前年を下回って推移した。2015年平均では、前年比0.6%高の100ポンド当たり226.5米ドルと過去最高値を更新した（表5）。

イ 肥育牛価格

2015年のチョイス級^{（注）}肥育牛価格（ネブラスカ、1100～1300ポンド、去勢牛）は、前半は高値で推移したものの、後半は需給の緩和に伴い急落したことから、平均では、前年比4.2%安の100ポンド当たり148.6米ドルとなった。

（注）肉質等級のうち、上から2番目の等級

ウ 牛肉卸売価格

2015年の卸売価格(チョイス級、600～900ポンド、カットアウトバリュー)は、100ポンド当たり237.5米ドルと前年比0.7%安となったものの、高値を維持した。

エ 牛肉小売価格

2015年の平均牛肉小売価格(チョイス級)は、前年比5.3%高の1ポンド当たり628.9セントとなった。

表5 生体牛と牛肉の価格の推移

(単位:米ドル/100ポンド)

区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
肥育もと牛	141.3	158.2	158.8	225.1	226.5
肥育牛	115.2	123.1	126.2	155.1	148.6
牛肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	181.3	190.7	195.6	239.2	237.5
牛肉小売価格 (セント/ポンド)	480.7	498.6	528.9	597.0	628.9

資料: USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook: Table」

注: カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に

再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

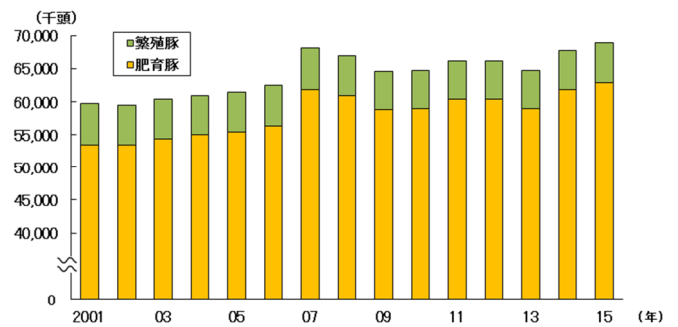
(3) 養豚・豚肉産業

米国の養豚は、アイオワ州やイリノイ州を中心とするコーンベルト地帯で、伝統的に穀物生産や肉牛経営の副業として営まれてきた。一方、ノースカロライナ州やオクラホマ州でのインテグレーションの出現は、養豚産業に対して、生産・流通などの面で大きな変化をもたらした。また、各州で環境規制を強化する動きがみられることから、大規模経営体による環境問題も顕在化している。

① 肉豚の生産動向

豚飼養頭数は、2010年以降はおおむね増加傾向で推移したものの、2013年は豚流行性下痢(PED)の発生により落ち込んだ。しかし、2014年には再び増加に転じ、2015年は前年比1.7%増の6891万9000頭と1944年以降で最高を記録した(図11)。飼養頭数の内訳を見ると、繁殖豚は600万2000頭(同1.1%増)、肥育豚は6291万7000頭(同1.7%増)となった。

図11 繁殖豚頭数と肥育豚頭数の推移



資料: USDA「Quarterly Hogs and Pigs」

注: 各年12月1日現在

2015年(2014年12月～2015年11月)の子豚生産頭数は、良好な収益性により繁殖母豚が増加したことに加え、一腹当たり産子数が10.38頭(同4.4%増)となったことから、1億2141万1000頭(同5.7%増)となった。



写真4 肉豚の飼養風景

② 豚肉の需給動向

ア 生産動向

2015年のと畜頭数(コマーシャルベース)は、飼養頭数の増加に伴い、1億1542万5000頭(前年比8.0%増)となり、豚肉生産量は1111万4000トン(同7.2%増)と過去最高を記録した(表6)。

一方、2015年のと畜時平均生体重(連邦政府検査ベース)は、128.4キログラム(前年比0.7%減)、平均枝肉重量(同)は、96.6キログラム(同0.5%減)となった。

表6 豚肉需給（枝肉換算）の推移

(単位:千トン)

区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
生産量	10,323	10,547	10,517	10,361	11,114
輸入量	364	364	399	459	506
輸出量	2,357	2,440	2,262	2,310	2,272
在庫量	246	283	280	253	267
消費量	8,338	8,440	8,665	8,544	9,340
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	20.7	20.8	21.2	20.8	22.6

資料：USDA/ERS「Livestock and Meat Trade Data」

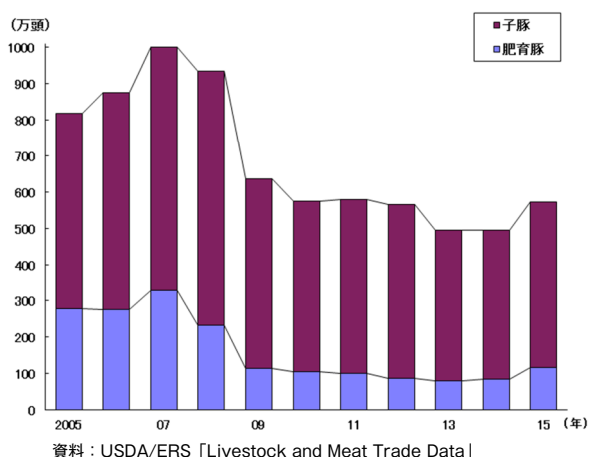
注：1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出入動向

2015年の豚肉の輸入量（枝肉重量ベース）は、消費量の増加や、主要通貨に対して米ドル高で推移したことなどにより、50万6000トン（前年比10.3%増）となった。国別に見ると、最大の輸入先であるカナダが38万8000トン（同9.8%増（総輸入量に占める割合は76.6%））とかなり増加した一方、デンマークは3万3000トン（同6.7%減（同6.6%））と減少した。

同年の生体豚の輸入は、ほぼ100%がカナダからである。同国からの輸入頭数は、米国内の強い需要により574万頭（同16.0%増）となった（図12）。

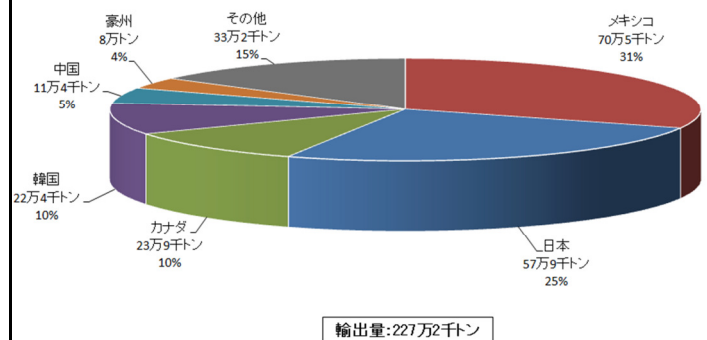
図12 カナダからの生体豚輸入頭数の推移



輸出量（枝肉重量ベース）は、2013年にPEDによる減産で減少したものの、2014年には増加に転じた。しかし、2015年は、主要通貨に対して米ドル高で推移した為替相場などから、227万2000トン（同

1.6%減）となった。国・地域別に見ると、メキシコ向けは、価格帯の安い豚肉を中心に好調であったことから、70万5000トン（同13.2%増）と日本を抜いて最大の輸出先となった（図13）。一方、日本向けは57万9000トン（同13.4%減）、カナダ向けは23万9000トン（同2.4%減）、中国向けは11万4000トン（同23.6%減）といずれも減少した。なお、韓国向けは22万4000トン（同28.5%増）と大幅に増加した。

図13 豚肉の輸出相手国（2015年）



資料：USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

最近の1人当たり年間豚肉消費量（小売重量ベース）は、ほぼ横ばいで推移していたが、2015年は牛肉価格が高値で推移したことによる代替需要などから、22.6キログラム（前年比8.7%増）と増加した。

③ 肥育豚・豚肉の価格動向

ア 肥育豚価格

肥育豚価格は、2005年以降、生産量の増加などにより低下傾向となり、2009年には世界的な景気の後退や新型インフルエンザなどによる内需・外需の減退から、100ポンド当たり41.2米ドルに下落した。しかし、2011年は、輸出需要の高まりなどにより、同66.1米ドルの過去最高値を記録し、その後も同60米ドル台の高値を維持した。2014年は、PEDの影響などから、同76.0米ドルと引き続き高値で推移したが、2015年は飼養頭数の増加などから同50.2米ドルと大幅に下落した。（表7）。

表7 肥育豚と豚肉の価格の推移

(単位:米ドル/100ポンド)

区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
肥育豚	66.1	61.1	64.1	76.0	50.2
豚肉卸売価格 (カットアウトバリュー)	93.7	84.5	91.7	110.1	79.0
豚肉小売価格 (セント/ポンド)	343.4	346.7	364.4	401.9	385.3

資料: USDA「Livestock, Dairy and Poultry Situation and Outlook: Table」

注1: 肥育豚価格は、全米の平均価格。

注2: カットアウトバリューとは、各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格。枝肉そのものではない。

イ 豚肉価格

2015年の部分肉卸売価格(カットアウトバリュー)は、生産量の増加などにより100ポンド当たり79.0米ドル(前年比28.2%安)となった。

また、平均豚肉小売価格も同様に1ポンド当たり385.3セント(前年比4.1%安)と下落した。

(4) 養鶏・鶏肉産業

米国の養鶏産業は、飼料穀物の一大生産国という利点を生かし、生産から流通までの一貫したインテグレーションの進展により、極めて効率的な生産が行われている。また、国内では、消費者の健康志向からむね肉を中心として消費を大きく伸ばすと同時に、不需要的部位のもも肉を中心に、鶏肉生産量の2割弱を輸出している。

① ブロイラーのふ化羽数の動向

2015年のブロイラーふ化羽数は、飼料穀物価格が安値で推移したことなどから、前年比1.7%増の93億1798万7000羽となった。

② 鶏肉の需給動向

ア 生産動向

2015年のブロイラー生産量(可食処理ベース)は、飼料価格の下落に伴い増羽が進んだことなどから、前年比3.8%増の1797万1000トンとなった(表8)。

1羽当たり平均重量(生体ベース)は、骨なしむね肉の需要増に伴うブロイラーの大型化を背景に近年増加傾向にあり、2015年は2.78キログラム(同1.9%

増)となった。

表8 ブロイラー需給(可食処理ベース)の推移

(単位:千トン)

区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
生産量	16,694	16,621	16,976	17,306	17,971
輸入量	49	51	55	53	59
輸出量	3,165	3,299	3,332	3,310	2,867
在庫量	268	295	303	309	378
消費量	13,660	13,345	13,691	14,044	15,094
1人当たり消費量 (年間、キログラム)	37.6	36.5	37.2	37.8	40.4

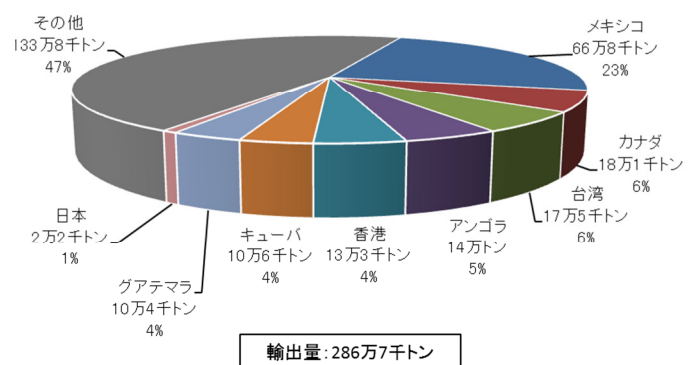
資料: USDA「Livestock, Dairy and Poultry Outlook: Table」

注: 1人当たり消費量は小売重量ベース。

イ 輸出動向

2015年のブロイラーの輸出量(可食処理ベース)は、2014年8月からロシアが禁輸措置を実施したことに加え、米国での鳥インフルエンザの発生により中国や韓国が輸入停止措置を講じたことなどから、前年比13.4%減の286万7000トンとなった。輸出先上位3カ国を見ると、メキシコ向けは同4.0%減、カナダ向けは11.3%増、台湾向けは同51.5%増となった(図14)。

図14 ブロイラーの輸出相手国(2015年)



資料: USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Situation and Outlook」

ウ 消費動向

2015年の1人当たり年間鶏肉消費量(小売重量ベース)は、牛肉や豚肉価格の上昇により比較的安価な鶏肉へ需要がシフトしたことなどから、前年比6.9%増の40.4キログラムとなった。

③ ブロイラーの価格動向

ア ブロイラーの生産者販売価格

2015 年のブロイラーの生産者販売価格は、飼養羽数の増加などにより、前年比 17.1% 安の 1 ポンド当たり 52.9 セントとなった（表 9）。

イ 鶏肉価格

（ア）卸売価格

2015 年のブロイラーの丸どり卸売価格（中抜き、12 都市平均）は、前年比 13.7% 安の 1 ポンド当たり 90.5 セントとなった。なお、国内向けが主体となっているむね肉が 1 ポンド当たり 134.0 セント（同 18.3% 安）、輸出向けが主体のもも肉は同 39.3 セント（同 35.3% 安）とどちらも下落した。

（イ）小売価格

ブロイラーの丸どり小売価格（中抜き）は、前年比 2.9% 安の 1 ポンド当たり 148.8 セントとなった。

表 9 ブロイラー価格の推移
（単位：セント/ポンド）

区分/年	2011	2012	2013	2014	2015
生産者販売価格 （生体）	45.9	51.1	60.4	63.8	52.9
卸売価格 （丸どり）	79.0	87.1	99.7	104.9	90.5
丸どり小売価格	129.1	142.2	149.6	153.3	148.8

資料：USDA「Livestock, Dairy, and Poultry Outlook：Table」

注：丸どり（中抜き）の価格。

（5）飼料穀物

米国は、世界最大の飼料穀物の生産・輸出国である。飼料穀物の主力であるトウモロコシは、世界の生産量および貿易量の約 4 割を占めていることから、世界の需給動向に与える影響力は極めて大きい。

① 穀物の生産動向

2015/16 年度（9 月～翌 8 月）のトウモロコシ（サイレージ用を除く）の生産量は、136 億 200 万ブッシェル（3 億 4500 万トン^{（注）}）（前年度比 4.3% 減）と、収穫面積および単収の減少により前年度をやや下回っ

た（表 10）。同年度の期末在庫は、前年度並みの 17 億 3700 万ブッシェル（4400 万トン）となった。

（注）1 ブッシェルを 25.4 キログラムとして換算。

表 10 トウモロコシ需給の推移

（単位：百万トン）

区分/年度	2011/12	12/13	13/14	14/15	15/16
生産量	313	273	351	361	345
国内消費量	278	263	293	302	299
うち飼料向け	115	109	127	134	130
輸出量	39	19	49	47	48
期末在庫量	25	21	31	44	44

資料：USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」



写真 5 トウモロコシの収穫風景

② 穀物の輸出動向

2015/16 年度のトウモロコシの輸出量は、19 億 100 万ブッシェル（4800 万トン）（前年度比 1.8% 増）とわずかに増加した。このうち、前年度まで最大の輸出先国であった日本向けは、1044 万トン（同 13.0% 減）と大きく減少した。一方、メキシコ向けは 1334 万トン（同 17.7% 増）となり、最大の輸出先となった。

③ 穀物の価格動向

2015/16 年度のトウモロコシの生産者販売価格は、引き続き豊作であったことから、1 ブッシェル当たり 3.61 米ドル（前年度比 2.4% 安）となった（表 11）。

表 11 トウモロコシ価格の推移

（単位：米ドル/ブッシェル）

区分/年度	2011/12	12/13	13/14	14/15	15/16
生産者販売価格	6.22	6.89	4.46	3.70	3.61

資料：USDA「Feed Grain Database: Yearbook Tables」